
無の刻

公

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無の刻

【Nコード】

N7590B

【作者名】

公

【あらすじ】

聖と魔の力を持つ種族が存在する世界 『アースティア』。その世界は滅びの道を歩んでいた。『無の刻^{とき}』。聖典・魔典に記された全てが無に帰すその日にヒトは恐れながら日々を送っていた。

序章（前書き）

王道的なファンタジー小説を心掛けています。どうぞ御覧ください。

序章

無

無は神

我は無なり、汝は無なり

無は誕生、無は終局

無を求めよ、無を恐れよ、無に帰せよ

無を呼べ、無に抗え

汝は無なり、我は無なり

無は真理

『エマニユエルの書・第零章・第零節』より

全てのモノが目の前から消えていく。

木も、草も、花も、川も、動物も、家も、雲も、空も、大地も…

…そして人さえも。

後に世界中に知れ渡る災厄

『カノッサの惨劇』。

たった一人の幼い子供を残し、その地はこの世界から完全に消え去った。

その事件をきっかけに世界中の人々は知ることになる。

創世の頃より伝えられてきた『エマニユエルの書』が真実である
ということ……。

序章（後書き）

初めまして、公という小説書きです。個性的なキャラを登場させつつ、シリアスや笑い、アクションなどを盛り込みつつ、様々な伏線を刈り取って物語を終わらせます。これから、よろしく願います。

第一章

アースティアには南北に分割された二つの大陸があり、それぞれ
の大陸には聖族と魔族が暮らしている。

北の大陸『ファティマ聖国』の人々は聖神を崇める『聖神教』を、
南の大陸『セルジューク魔国』の人々は魔神を崇める『魔神教』を
崇拜している。

『心を以って人々を救う』ことを教えとする聖神教に対し、魔神
教は『力を以って人々を守る』ことを教えとしている。

聖神教の総本山にして、ファティマ聖国の首都『ミレートス』。

そこは聖神教の教皇でもあり、聖国を治める聖母が住むことで聖
都と呼ばれている。

聖都の中央に位置する聖殿。

聖母の一族以外立ち入り禁止とされている聖殿の地下。

そこに一人の女性がいた。

長い銀髪と青い瞳を持ち、白いローブを身に纏った彼女こそが現
代の聖母、サラ・パウロ・ファティマである。

彼女の目の前には小さな泉があり、底の方が淡く光っている。

空中には水晶が浮かんでおり、サラはその水晶に触れて目を閉じた。

すると頭の中に、白く光り輝く何かを深い影でも闇でもない何か
が世界を覆い尽くし、やがて何もかもが消滅する映像が流れてきた。

そして、そこへ小さな八つの光が浮かび上がった。

「やはり……無が迫っている……しかし今は……」

「母上……」

ふと後ろから声をかけられ、サラは振り返る。

そこには彼女と同じ銀髪をポニーテールにした碧眼の女性が立っていた。

服装は肩と胸の上部を露出させた白と黒の服で両拳にはグローブ
が嵌められ、黒のスパッツとかなり活動的な服装をしている。

「テレサ。どうかしましたか？」

「やはり『無の刻』が迫っているのですね？」

「……………」

「神託は何と？」

「……………無の中に光る八つの希望……………」

「!？」

サラの言葉に女性　テレサ・エックハルト・ファティマは大きく目を見開き、驚愕した。

そして彼女は何も言わず、階段を駆け上がって行った。

娘の背中を見つめながら、サラは水晶を見上げる。

「八つの…………希望」

ファティマ聖国の辺境に位置するタレスの街。

その街に続く街道を一台の馬車が通っていた。

「おゝい、お客さん。見えて来たよ」

御者は街が見えて来たので後ろの荷台に向かって声をかける。

そこには、一人の少年が横になっていた。

雪のような真っ白な髪を結わえ、紫のベルトの多く取り付けられた服の上に黒いロングコートを羽織っており、その横には剣が置かれていた。

少年は、ゆつくりと目を開け、金と黒の左右色の違う瞳を細めて体を起こし、馬の歩く先を見た。

「随分、遠くまで……来たな」

少年は小さく呟く。

「うわ!？」

突如、ガタンと馬車が揺れた。

「どうした？」

「よ、妖獣が……!」

馬車の前に複数の魔物が立ちはだかり、御者は暴れる馬を宥める。

レンは、荷台から飛び降りると、剣を抜いて妖獣の前に立つ。

妖獣……アースティア全土に分布する異形の生物で、動植物から鉱物に至るまで万物が異様な姿で進化したものである。

性格は大人しいものから凶暴なものまでいて、街の近くや街道沿いにいる妖獣は比較的、弱い分類に位置され、武芸を齧ったものであれば容易に倒せる。

しかし未開の地などに生息する妖獣は凶暴で、また知恵を持っている者もいる。

そういつた妖獣を倒し、首や倒した証拠を各街の教会や自警団に持って行くと報酬を受け取ることが出来る。

近年では、それを生業にしている妖獣ハンターなども多くいる。

少年の前にいる妖獣のタイプは狼、ワシ、蜂と比較的、弱いものだ。

少年は真っ先にこちらに向かって来た狼タイプの妖獣を斬り裂くと、蜂タイプとワシタイプの妖獣が放つて来た毒針と羽を避ける。

すると飛び上がり、剣を横に大きく振るって蜂とワシの妖獣を倒した。

血が付いた剣を拭いて鞘に戻し、馬車の荷台に上がる。

「いや、お兄ちゃん強いねえ」

御者は上機嫌で再び馬車を走らせる。

「近頃、魔物も活発になっちまったな……やっぱり『無の刻』が近い所為かね」

『無の刻』……それを世界で知らぬ者はいないだろう。

聖族と魔族がそれぞれ信仰する聖神教と魔神教には、それぞれ聖典と魔典という教典があるが、それぞれ最初の部分が共通していた。

その共通した部分を『創世』を意味する『エマニユエルの書』と呼ばれ、教典とは別扱いされている。

この世の全てが無に覆われるという『無の刻』。

草木、山、海、動物、虫、ヒト、光や闇さえも完全に消滅するという刻である。

エマニユエルの書には、それがいつ起こるのか正確な時は記されていない。

しかし、ここ50年の間に自然災害や妖獣の多発により無の刻が迫っていると考えが広まった。

そして10年前、それを決定付ける事件が起こった。

『カノツサの惨劇』……ファティマ聖国の辺境に位置するカノツサという村が、一晩で消滅した。

カノツサの村を円形状に地面の底から空まで全てが消滅し、現在そこは『無の領域』と呼ばれ、近づくことを禁じられている。

近くまでいけば、空に大きな穴が空いてるように見え、人々は無の刻が近いということを確信してしまった。

「お兄ちゃん、『無の刻』が来たらどうする？」

「……………」

「俺あ家族といつも通りの生活をしたいね」

「……………家族」

「ま、そんな時が来ないで一生をまっとう出来る方が良いに決まってるけどな」

「……………」

御者の他愛の無い話を聞きながら、少年は空を見つめる。

何処までも続くように見えるこの空も、無に包まれる限りあるものだと思いながら。

タレスの街へ着くと、少年はとりあえず宿へ向かう。

それなりに大きな街でも賑わっており、宿を探すのにも苦労した。

すると、『オ〜!』という歓声が響いた。

何かと思い行ってみると、街の中央広場で人だかりが出来ていた。

「さあ!! いよいよ決勝戦です!」

「（決勝?）」

決勝、というからには何か勝負をしていたのだろう。

少年は後ろから背伸びするが、何が起きているのか分からない。

「決勝の種目はホットドック！！ しかもカマド屋特製ビッグホットドックです！ 先に50個平らげた方が勝ち！！」

「早食い？」

「お！ 兄ちゃん、この町は初めてか？」

ポツリ、と少年が不思議そうに呟くと男性が声をかけて来て、説明した。

「この街の名物だよ。半年に1回、大食い、早食いに自信のある奴がこの街に集まっては賞金10万ルードをかけて勝負してんだ」

「……………くだらん」

「そう言い切るのは間違いだぜ。何しろこの行事のお陰で聖都、果ては魔国からの観光客も来るぐらいだからな」

そう言われ、少年は納得したように周囲を見回す。

人ばかりの中には魔族特有の褐色肌の人間も多く見られた。

聖族と違い魔族は褐色の肌が特徴であり、また聖術と呼ばれる聖族のみが使える術を使う者には、魔族から発せられる魔力を感じる事が出来る。

「そして、今回も当然残っております！ 前人未到の十連覇にいいよ王手です！！」

「十連覇？」

「そうよ！ 奴こそ、この街の誇り！ 奴を倒そうと幾人の大食い、早食い自慢が無残に散っていったか……」

少年は、そう言われて3mはありそうな太った男を思い浮かべる。

贅肉タラタラで、皿を掴んで一気に流し込むという、現実的にあり得ない光景だ。

「大会9連覇の無敵の胃袋を持つ少女！！ アリアード・シェーラ嬢です！！」

「いえーい！」

舞台の上で一人の少女が飛び上がる。

長い金髪をなびかせ、教会指定の白の布地に金の十字マークが刺繍された法衣を身に纏っている。

「……………神官？」

「ああ！ この街の教会の神官の娘さ！」

あんな細い少女が大会9連覇？

レンは自分の目を疑った。

少女の横に座っている筋肉質で2mはある男の方が、よっぽど食べそうだ。

アリアードと呼ばれた少女と対戦相手の前に、山盛りの特大ホットドックの載った皿が置かれる。

「それでは決勝戦！ レディ……ファイ！」

何故か大食い大会でカンとリング音が鳴り響いた。

対戦相手の男性は物凄い勢いでホットドックを食べ始めた。一口、二口で口の中に収まってしまふ。

「聖神ノアよ……我に血と肉をお与えになられた事を感謝します」

対するアリアードは手をつけず祈っていた。

が、次の瞬間、彼女は目を鋭くさせると、ホットドックを掴んだ。

ぱくっ！ ごくん！

「……………」

少年は、目を閉じ眉間を押さえる。

旅疲れでも出ているのかと思い、とりあえず意を決してもう一度、目を開く。

ぱくっ！ ごくん！

ぱくっ！ ごくん！

ぱくっ！ ごくん！

アリアードは、ホットドックを一つずつ飲み込んでいた。

大きな口を開けて神官とは思えぬほどの食欲ぶりで飲み込む。

「凄い！ アリアード選手、ホットドックを嚙まずに飲み込んでます！ 彼女の胃はブラックホールか！？ はたまた別の世界にでも通じているのか！？ 次々とホットドックを減らしていきます！」

彼女の凄まじいスピードに焦りを感じた対戦相手もペースを上げるが、やがて半分にも満たない所で顔を青ざめさせ、ボタンと椅子から倒れてしまった。

「ふう、ご馳走様でした」

一方、アリアードの皿はパンカス一つ残っていない。

「そこまで！ アリアード選手の勝利……」

「あれ？ それ残すんですか？ じゃあ勿体無いので貰っちゃいますね」

アリアードの優勝が高々と告げられようとしたが、その前に彼女は対戦相手の残ったホットドックを食べ始めた。

更に歓声が湧く。

少年は、凄い女もいるものだとし感心しながら、宿へ向かってその場から立ち去った。

「ゴメンよお、今、部屋一杯なんだよ」

宿屋へ行くとカウンターでそう女将に言われた。

例の早食い大会もあり、街は観光客が一杯来て、宿の部屋は満杯になってしまったらしい。

それは他の宿でも同じらしく、この時期になると宿は普通予約しておくのだと告げられた。

「……………野宿、するしかないか」

「おや？ お兄さん、旅の人かい？」

「ああ」

「それだったら教会の宿舎に行ったらどうだい？」

各街に設置されている教会は路銀の無い旅人の為に無料で宿舎を提供している。

そこを利用出来るのは旅をしている者だけで、観光客などには開放されていない。

少年は、教会の場所を聞いて宿屋から出る。

教会は街の東に位置し、武器屋、道具屋、食材屋など並びにあり一際大きな建物なので、すぐに見つかった。

巨大な扉の上には、ステンドグラスが日光に照らされている。

少年は、ゆつくりと扉を開いた。

すると人気の無い聖堂の奥、一人の少女が、聖像に向かって跪き、祈りを捧げていた。

「聖神ノア……『無の刻』は刻一刻と近づいて来ています。あなたに仕える者の一人として、私に出来る事は無いのでしょうか……？」

それは先程の早食い大会で優勝したアリアードだった。

大会に出ていた明るい彼女と違い、その祈りを捧げる姿は凜としていた。

しばらく彼女は聖像に向かって祈っていたが、ふと人の気配を感じて振り返ると少年の存在に気付いた。

「？ 貴方は？」

「……………旅の者だが……………宿舎を借りたい」

「ああ、今は宿が一杯なんですネ。分かりました。こちらです」

アリアードは立ち上がると聖堂の横にある扉を開け、案内する。

促されて少年は後に続く。

教会だというのに、神官の姿が見えないので眉を顰めるとアリアードが説明する。

「今、司祭様達は聖都に行かれてる為、教会は私と数名の神官しかいないんです」

「そうか……」

「そういえば貴方のお名前は？」

「……………名前……………」

「はい。後で名簿に名前書かないといけないので……………」

名前を尋ねられ、少年は呟くように名乗った。

「レン……………レヴィナス」

第一章（後書き）

暗い主人公と明るいヒロインの形です。説明ばかりで見苦しいかもしれません。ご指摘などがあればお願いします。

第二章

「レンさんですか……私、アリアード・シェーラーと申します。アリア、って呼んでくれたら、そこはかとなく嬉しかったりします」

「知ってる」

「え？ 何処かでお会いしましたか？」

「さっき、大食い大会で優勝してた……」

そう言われ、アリアードは、「ああ」と納得し、恥ずかしそうに笑った。

「えへへ……食べるのは私の趣味でして」

果たしてアレを趣味という範囲で捉えていいのかどうか微妙だが、いきなりアリアードは涎を垂らし、「うふふ」と不気味な笑みを浮かべる。

「やっぱりカマド屋さんのホットドックは絶品ですね。あのパンの焼き加減、ソーセージの固さ、炒められた玉ねぎの甘さ、ケチャップとマスタードの絶妙な量……どれを取っても一級品ですう」

ほっぺを落とし、キラキラと輝かしい笑顔を浮かべるアリアード。

すると彼女は、クルツと振り返って言った。

「実はあの後、カマド屋のおじさんからホットドック頂いたんです。一緒に食べませんか？」

「別にいい……食欲無い……」

「ノープロブレムです！ カマド屋のホットドックは食欲があらうと無かるうと自然に食べたくなります！ ってゆーか、食べなきゃ損です！」

ズイツと迫って力説するアリアード。

レンは何やら異様な気迫を感じ、頷いた。

「分かりました！ あ、部屋は此処ですので待ってて下さい！ すぐに戻って来ます！」

アリアードは嬉々として走り出して行った。

勢いに圧されてしまったもののレンは一応、案内された部屋に入る。

部屋は窓が一つと机とベッドがあり、それなりの生活が出来るようになっていて。

ザックを置いてベッドに腰掛けると、ドンドンと強く扉がノックされる。

「私です！ レンさん、ホットドック持ってきましたよー！」

本当に持って来たアリアードに溜息を零し、レンは扉を開ける。

彼女の両腕には紙に包まれた大量のホットドックが紙で包まれ、
香ばしいニオイをさせていた。

ズカズカと部屋に入って来るとテーブルにホットドックを置き、
その中の一つを手取る。

「さあ！ どうぞ召し上げね！」

「……………」

彼女は包装紙を捲ると、バクツと齧りついた。

レンも同じように、一口だけ食べてみる。

「（もぐもぐ）ん……………幸せですう……。どうですか？」

「……………分かん」

「（ぶばっ！）」

レンの感想を聞くと、いきなりアリアードは嘔き出してしまい、
食べかすがレンの顔に飛び散ってしまった。

彼女は立ち上がると、ヨロヨロと後ずさりながら信じられないも
のを見るようにレンを見る。

「レ、レンさん……………味覚障害？」

「何でそうなる？」

「だっておかしいです！ カマド屋のホットドックの美味しさが分からないなんて人間失格です！ ってゆーか処刑ものですよ！」

顔についた食べカスを拭きながらレンは訳の分からない彼女の理論に呆れ果てる。

が、ふと疑問が浮かび上がったので質問した。

「お前……神官なのに、何であんな大会に出ている？」

「ほへ？」

「普通、場違いだろう？」

神官の仕事といえば、神に祈り、慈善活動を行ったり、また聖術と使える者は街の自警団などに協力し、妖獣討伐を仕事としている。

早食い大会に参加するなど神官としては失格とも思える行為だ。

彼の疑問は当然と言える。

「そうですね……」

が、アリアードはその質問に対し、不意に窓の外を見て答えた。

「『無の刻』に対して自分に何ができるのか……ですね」

「？」

「皆、やっぱり、いつ『無の刻』が訪れるか不安なんです。あの『カノッサの惨劇』から……」

その言葉に一瞬、レンの目が細められるが彼女は気付かない。

「だったら、その不安を少しでも取り除いて上げる事が出来るなら、って町長さんとかにかけ合って、大会を開いて貰ったんです」

結果、このような観光名物が出来て、街は賑やかになり人々は笑顔でいられる。

「だが、お前が生きている間に『無の刻』が訪れるとは限らない……」

「それならそれで良いじゃないですか」

そう言ってニコツと微笑むアリード。

その笑顔を見て、レンは何故か彼女から視線を逸らした。

まるで、見たくない、というような感じで。

アリードはその態度に首を傾げるが、突然、部屋の扉がドンドンとノックされた。

レンが「どうぞ」と応えると、勢い良く扉が開かれ女性神官が入って来た。

「アリア！ ホットドックのニオイがするから……こんな所にいたのね！」

「ほ？ ほうはひはんへふは？」

「……………飲み込みなさい」

口一杯にホットドックを頬張るアリアードに神官が顔を引き攣らせながら言うつと、ごつくと飲み込んで再度、「どうしたんですか？」と尋ねた。

「大変よ！ 海岸に魔国軍の兵隊が流れ着いたの！」

神官の発言に、アリアードは驚愕しレンも眉を顰めた。

神官が慌しい様子で担架を運ぶ。

担架には、大柄な褐色肌の男性が傷だらけの姿で横たわっていた。

黒髪を逆立てた男性で、ボロボロの漆黒の鎧を着ている。

褐色の肌からして男性は魔族だという事は分かった。

魔族は南の大陸を統括する『セルジューク魔国』に住み、聖族の住むファティマ聖国とは友好関係にある。

男性の鎧にはセルジューク魔国の証である斧と鷲の紋章が刻まれており、これは彼が魔国軍に属している事を証明している。

何で正規軍の男性が、他国のこのような辺境の街の海岸で発見さ

れ、傷だらけになっているのかは分からないが、神官としてまず彼を治療する事にした。

「アリア！」

「ええ、分かってます。その方を横に」

聖堂の中に運び込まれて来た男性を長椅子の上に寝かせると、アリアードは杖を持ち、先端の宝珠を男性の体に近づける。

それを聖堂の隅で見ていたレンは、ピクツと反応する。

「聖神ノア……傷付き苦しむ者に癒しの光を」

アリアードがそう唱えると、杖から淡い光が発生し男性の傷口が見る見る内に閉じていった。

「（聖術師か……）」

聖族が秘めている内なる力　聖力。

その力を用いて癒し、浄化の術を使う者を総じて聖術師と呼ぶ。

また逆に魔族は魔力を用いて、破壊の術　魔術を使い、それらを使う者を魔術師と呼ぶ。

アリアードの聖術を受けた男性の傷は、殆ど消えた。

痛みの無くなった男性はゆっくりと目を開け、口を開いた。

「此処……は？」

「ファティマ聖国のタレスの街です。貴方は街外れの海岸に倒れていたんですよ？」

「そうか……無事に聖国に来れたのだな……」

男性はホッとした様子で呟く。

「貴方は魔国の軍の方ですね？」

「ああ。セルジューク魔国王都軍第二師団所属、ヴァルター・ユング中将だ……」

男性　ヴァルターが名乗ると、アリアードを含めた神官がザワついた。

「あの魔国軍随一の戦士であるヴァルター・ユング將軍ですか？」

「随一かどうかは分からないが……な」

何処か自嘲するかのようにはヴァルターはそう言っ、体を起こそうとするが傷は消えてもまだ痛みは残っており、表情を歪めた。

「ぐ……」

「あ、まだ起きない方が良いでしょう。傷は治しましたが、痛みは残っている筈です。それに聖術では体力まで回復は出来ないのでから」

「そうも言ってられない……私は今すぐ聖母殿に伝えなければなら

ぬ事が……」

「？ 聖母様にですか？」

「此処の長に会わせてくれ。聖母殿に紹介状を書いて貰いたい」

「生憎、大司祭様は聖都へ行っておられます。代理として私が話を聞きます」

「君は……」

「第一司祭のアリアード・シェーラーと申します。大司祭様が不在の間は私が代わりを務めています」

意外にも高位の神官であるアリアードにレンは驚く。

ヴァルターの様子が尋常でないと悟ったアリアードは、彼の向かいの長椅子に座る。

他の神官達も真剣な表情で彼の話に耳を傾けるが、ヴァルターは話しくそくに他の神官を見る。

「すいませんが、皆さんは席を外してくれますか？ 彼の話は私だけお聞きます」

彼の心情を悟ったアリアードは神官達にそう告げる。

神官達は気になりながらも彼女の言葉に従い、聖堂から出て行った。

「さて、これで誰もいませんよ。心置きなく話してください」

アリアードに促され、ヴァルターは目を閉じて話し始めた。

「魔王様が………殺された」

「!？」

一瞬、その場が静寂に包まれた。

アリアードは耳を疑った。

「魔王………様が？」

魔王………その名の通り、セルジューク魔国の王で、全魔族を統べる人物である。

セルジューク魔国には、魔神教と呼ばれる宗教が浸透しているが、神政政治で聖母が国家元首も兼任しているファティマ聖国と違い、セルジューク魔国は宗教分離で国王と教皇が別々に存在している。

が、その魔王自身も敬虔な魔神教の信者であり、教皇の発言力は王に匹敵するというのが実状である。

「一体、何処の誰が!？」

魔王の殺害、というショックがアリアードの声を荒げさせる。

「イブン………教皇だ」

その名を聞いて、アリアードは完全に言葉を失った。

教皇イブン。

聖母サラ・パウロ・ファティマ、魔王ガザリー・ハーミド・セルジュークに並ぶ世界の三大指導者の一人。

そんな人物が魔王を殺したなど前代未聞、あつてはならない事だ。

教派は違えど、聖神教と並ぶ魔神教の最高指導者。

聖母と同様、聖神教徒であるアリアードも尊敬していた人物でもある。

また教皇イブンは、魔国最高の魔術師である他に医学、哲学、科学などにも造詣深く、深い信仰心と優れた知識を持つ賢人で、人々の信心を一身に集めている素晴らしい人物だと、ファティマ聖国でも有名だった。

「それは……本当なのですか？」

「ああ……」

膝に乗せた拳を震わせながら問うアリアード。

ヴァルターは頷き、その時の事を語った。

セルジューク魔国・首都ナーガルジュナ。

魔王の城があり、聖都ミレートス、魔都シャンティデーヴァと並ぶ都市の一つである。

その象徴である魔王城の玉座の間に、ヴァルターと複数の將軍、大臣、そして魔王ガザリー・ハーミド・セルジュークがいた。

ガザリーは聖母との交流も多く、互いに国の技術交換、貿易、他国での商売など広く開放し、両国からの人望厚い王であった。

そんな彼の下にある日、魔神教の教皇イブン・ファラビーが側近である六司教を引き連れてやって来た。

「おお、イブン。今日は、どうされた？」

ガザリーは膝を突いて頭を垂れるイブンと六司教に向かって穏やかに話しかける。

その様子をヴァルターのみが違和感を感じていた。

六司教……イブンの側近であり、またその実力は魔国軍の將軍以上とも言われる魔国教の6人の司教である。

いつもならイブンが謁見に来るとしても彼の護衛をするのは2人、多くて3人だ。

それが6人全員やって来るのはヴァルターも初めて見る光景だった。

それが彼の感じる違和感でもある。

「陛下。実は本日は陛下にお願いがあつて参りました」

「願ひ？ はっはっは。魔神教の最高指導者である貴方から頼み事とは。これは断る訳には参りませんな」

穏やかに笑うガザリーに、イブンは冷笑を浮かべて言った。

「魔宝具を渡して頂きたい」

「！？ イブン、今何と？」

イブンの発言にガザリー、そして臣下達の顔色が変わった。

イブンは笑みを浮かべ、立ち上がって再び告げた。

「魔宝具を渡して頂きたい、と言つたのです」

「イブン、貴方は何を言っているのか承知しているのか？ アレは……」

ガザリーは信じられない様子で問い返す。

魔宝具……創世の頃より伝えられし伝説の秘宝で、その力は世界のバランスを崩すと言われている。

その在り処は代々、魔国の王位継承時にのみ口伝でみ教えられ、世界でも唯一人、魔王のみが知っているのだ。

「どうしても渡して頂けぬのなら……」

そうイブンが言うと、彼の周囲にいた六司教が動いた。

「かつ……」

その中の一人の剣が一瞬でガザリーの腹部を貫く。

「陛下！」

「イブン様、血迷ったか！？」

ヴァルターが真っ先に斧を持つと、別の六司教がダブルセイバーを持って攻撃して来た。

「ぬ！」

その間に他の六司教は、他の兵士、將軍、大臣などを己の武器で始末していく。

「ぐ……イ……ブン」

ガザリーはゴフツと血を吐きながら、イブンを睨み付ける。

が、イブンは笑みを浮かべ、魔術の詠唱に入った。

「魔神アダムよ。汝の前に立ちはだかるものを全て滅せよ」

魔力が彼の手の間に集約され、光り輝く。

「な……イブン！？」

「陛下!! やめろ、イブン!」

ヴァルターの制止も聞かず、イブンの手から一条の閃光が放たれる。

閃光はガザリーを呑み込み、玉座ごと消滅させた。

「陛下……っ! イブン、貴様あ!」

「やれ」

イブンの命令で六司祭が一斉にヴァルターに向かって襲い掛かって来た。

「爆破斬!!」

が、ヴァルターは床に斧を叩き付けると、足元を碎き、そのまま下の階へと落下して行った。

「……………追え」

「そんな……イブン教皇がそんな事を……」

アリアードは呆然と呟き、驚きを隠せないでいる。

こんな国の端っこの街に、いきなり国家間レベルの問題を掲げら

れてどうしたら良いのか混乱してしまっている。

「その事を国民に告げたのですか？」

「いや……イブンは、私が逃げたのを理由に、陛下殺害の容疑者として私に追っ手を差し向けた」

結果、追っ手にやられながらも何とか海に出てファティマ聖国に辿り着いたとヴァルターは苦々しげに言った。

「では、既にセルジューク王国では貴方はお尋ね者なわけですね」

「ああ。イブンがいつこの国にも私を指名手配するよう聖母殿に言うのか分かん」

「聖母様は聡明な方です。貴方のような有名な武人が魔王様を殺害したと聞いて、素直に受け入れる方では無い筈です」

「だが、陛下が死んだのは事実。一刻も早く、この事を聖母様にお知らせせねば……！」

鬼気迫る様子のヴァルター。

魔王が教皇によって殺された。

それが事実なら、これは異常事態である。

何かが動き始めている……アリアードはそう感じずにはいらなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7590b/>

無の刻

2011年1月8日22時51分発行